

あとがき

この本を書くのはとても楽しい作業だった。歴史書をひもときながら、ガーナの歴史の知られざる側面に会うのは、それ自体が心おどる経験だ。またガーナの村の風景を思い浮かべながら、いろいろな人から聞いたストーリーを書き下ろしていくのもまた楽しい。そんな楽しさが、本書を読み終えた読者の方に少しでも伝わっただろうか。

一九八六年に青年海外協力隊員としてはじめてガーナの地を踏んで以来、この国とのつきあいもずいぶんと長いものになった。大学を卒業したばかりの若造だった当時の筆者を、暖かく迎え助けてくれた多くのガーナの人たちの顔が目につく。旅行中に病気になるたびに病院に連れて行ってくれた宿屋のおばちゃんや、アブラヤシ畑の中でとれたての椰子酒を飲ませてくれた農家の人、乗り合いタクシーの中に置き忘れた財布を追いかけてきて届けてくれた見知らずの人など、思い出しはじめるときりがない。本書が、そんな心優しい人たちが住む、ガーナという国のよさを知っていただける一助となれば嬉しい。

二〇〇三年八月

著者